



演劇ジャーナリスト 徳永京子の パリ・レポート

—日本現代演劇をパリの観客はどう見たか。

言葉の壁は薄かった、あるいは、とても低かった

フランス・パリで開催中の一大文化イベント「ジャポニスム2018:響きあう魂」(事務局:国際交流基金)の一環として、日本の現代演劇がまとまって紹介された。東京芸術劇場も共催したプログラムを中心に、現地に足を運んだ演劇ジャーナリスト、徳永京子のレポートをお送りする。

2015年3月、『エッグ』をパリの国立シャイヨー劇場で上演したあとの野田秀樹の感想が印象に残っている。それは「フランスはコンテンポラリーダンスやサーカスが盛んだからか、お客さんがパフォーマンスの動きを楽しむこと、フィジカルからストーリーを読み取ることに長けている」というもので、言葉遊びも多く、ストーリーも複雑な『エッグ』が、フランス語字幕の不自由さを乗り越えて、多くの観客に伝わったという確信と喜びに満ちたものだった。

10月と11月の延べ2週間、「ジャポニスム2018」のラインナップを中心に現代演劇を6本観た。「ジャポニスム2018」は、18年7月から19年2月までの長期間、世界にまだ知られていない日本文化の魅力を紹介することをコンセプトに、パリ市内を中心とした様々な施設で、展覧会、舞台公演、映像、生活文化の4ジャンルの作品が展示、上演される大規模なイベント。これまでの海外での日本文化紹介と言うと、演劇は古典が主だったのが、リアルタイムの社会を反映した作品が目される30代、40代の作り手を中心にプログラムが組まれた点で非常に画期的で、それらがフランスの観客にどう受け入れ

られるか、あるいは拒絶されるかに関心があつた。

その関心は、言い換えれば心配でもあったのだが、結果から言うとまったくの杞憂で、前述の野田の言葉を追体験することになった。さらに、それが作品と作家を照らし直し、内包していたポテンシャルを目覚めさせたり、新たな可能性を引き出す場面に立ち会うことができた。「言語を超えたコミュニケーション」という常套句があるが、日本語がネックになって世界への発信力が弱いとされがちな現代演劇が、フランスの観客との交感によって言語の壁についての認識を改める機会になったと感じた。

一作ずつ具体的に説明したい。まずNODA・MAPの『鷹作 桜の森の満開の下』、『エッグ』同様、約1000人を擁すシャイヨー劇場で上演された。舞台の中央に鎮座する桜の大木、舞台全体を覆う巨大な紙、それを美しく操るアンサンブルの動きなど、オープニングから観客の目を奪う仕掛けが満載ということもあるが、客席全体が前のめりで作品に集中しているのをひしひしと肌で感じた。第一幕が終わった瞬間、熱い拍手が沸き起こったのだが、それはパフォーマンスに対して「あなたたちはすごいことをしている」という真っ直ぐなリスペクトだと感じた。笑いもよく起きていたが、たとえば大倉孝二のぼやきに対して間髪入れずに反応があり、音と表情でおもしろさを感じているようだった。字幕は実際の戯曲よりシンプルな内容にしていたと思うが、舞台に集中してもらうためには良い選択だったと思う。

サンプルの『自慢の息子』は、パリの中心からやや離れたジュヌピリエ劇場で、席数190で4ステージだったが、知名度がほとんどなかったにも関わらず前売りが完売という好感で幕を開けた。同劇場で先に上演された庭劇団ベニノガル・モンド紙に記事が載るなどして勢いがついたこともあるだろうが、フランスの観客の好奇心を頼もしく思った。作・演出の松井周が描くのは、小さなアパートに暮らし、自分を王だと宣言する男性と、彼を誇りに思



野田秀樹 作・演出「鷹作 桜の森の満開の下」 Photo by Nathalie Vu-Dinh



松井周 作・演出「自慢の息子」 ©Yukari Ito 写真提供: 国際交流基金

母、彼の部屋にやってきた観光客らが形成する疑似国家の物語。住宅事情や登場人物の職業に日本的なコンテクストが少なからず含まれているにも関わらず、観客の反応はヴィヴィッドで、片桐はいりや伊藤キムのしなやかな身体性、ゴミと宝物のボーダーにあるような美術の力もあって、風変わりな設定をむしろ楽しもうとするオープンな姿勢を感じた。初日を開けて数日後の松井に聞いたところ、「何人もの観客から、ストレンジとストロングという言葉で感想を言われた」と言っており、「大事な部分は伝わったと感じた」と大きな手応えを打ち明けてくれた。

10月の滞在ではこの他、パリで活躍する日本人俳優の竹中香子が出演していた『LOVE ME TENDER』(ブッフ・デュ・ノール劇場)と、国立コリーヌ劇場からSPAC(静岡県舞台芸術センター)の宮城聡が委嘱された『Révélation(顕れ)』を観た。『LOVE ME TENDER』で竹中は、日本人あるいはアジア人と指定されていない役を地に足の着いた落ち着きとしなやかさで演じ、SPACの面々も平常心によるハイクオリティな舞台をつくりあげていた。どちらも「ジャポニスム2018」参加作品ではないが、通常のフランスの文化事業に日本人の活躍がこうして組み込まれているのも大きな意味のあることだろう。

11月の滞在は、SPACの『マハーバーラタ〜ナラ王の冒険〜』をラ・ヴィレットで、藤田貴大上演台本・演出の『書を捨てよ町へ出よう』をパリ日本文化会館で、岩井秀人構成・演出の『ワレワレのモロモロ ジュヌピリエ編』をジュヌピリエ劇場で観た。前述の『Révélation(顕れ)』でもわかるように宮城のフランスでの位置付けはすでに高く、『マハーバーラタ』は14年のアヴィニオン演劇祭(フランス)で上演されて大成功を収めている。その時は野外だったが、ラ・ヴィレットはかつて食肉市場を擁した広大な土地が再開発された中にあるイベント会場。古い石畳が敷かれた場所に柱と屋根をつけたような、半屋外、半屋内と形容すべき不思議な場所だった。しかし、客席を360度取り囲む通路を設置するお馴染みのセットとは好相性で、ラストシーン、最後まで閉められていた舞台正面の大きな窓が開け放たれると外の景色が作品の世界と混じり合い、この場所ならではの感動が生まれた。1000席近い会場は満



藤田貴大 上演台本・演出「書を捨てよ町へ出よう」 写真提供: パリ日本文化会館



岩井秀人 構成・演出「ワレワレのモロモロ ジュヌピリエ編」 ©KOS-CREA 写真提供: 国際交流基金

席、儀式性の高い宮城の演出を食い入るように観る人も多く、フランスでこの作品が広く尊敬を集めていることが伝わってきた。

『書を捨てよ〜』は、存命中からフランスで人気の高かった寺山修司の同名映画を藤田が舞台化。寺山が才能を発揮したコラージュの手法を用い、演劇と映像とファッションショー、物語のせりふと現実世界からの言葉を大胆につなげた作品は、理解という点では観客に親切ではないが、客席の集中力は途切れなかった。

『ワレワレ〜』は「ジャポニスム2018」の演劇作品中で唯一の日仏共同制作。もともと『ワレワレ〜』はハイバイの作・演出家、岩井秀人がワークショップでおこなっていた創作方法で、参加者が実体験を話し、自分で脚本に起こし、それをグループで演じて再現、最終的には岩井が構成して演劇として形を整えるシリーズ。これまで日本各地、あるいは高齢者の演劇集団さいたまゴールド・シアターで上演してきたが、今回それをフランス人とおこなった。共同製作者であるジュヌピリエ劇場の協力で演劇経験のない一般市民をオーディションし、プロの俳優を混ぜた混成チームでつくりあげた作品は、フランスの観客に大きな感動と衝撃を与えたようだ。というのも、ジュヌピリエ劇場のある地区は移民が多く、出演者の多くが、自身が幼い頃、あるいは親の代に別の国から移住してきた人々で、そうした家庭にあった問題が具体的に、けれども淡々としたトーンで描かれているから。日本での『ワレワレ〜』はどちらかという「トラウマになっているような悲惨な出来事が、演劇にすることで笑えるようになる」だったが、ジュヌピリエ編は「悲惨な出来事が浄化されていく様子」を見つめる体験だった。ここで生まれた波はおそらく、これからあちこちに広まっていくのではないだろうか。

観客の意思表示が明確な分、どの公演も途中で席を立つ人がいたが、届かないものがあるとしたら、それは言語によるものではなく、好みの問題か、事前情報不足による誤解ではないか。日本の現代演劇はもっと世界に出ていい、そう実感した2週間だった。

文:徳永京子

